

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

RECD 04 APR 2003

PCT/JPO3/01205

05.02.03

[Handwritten signature]

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日

Date of Application:

2002年 2月 8日

出願番号

Application Number:

特願2002-032831

[ST.10/C]:

[JP2002-032831]

出願人

Applicant(s):

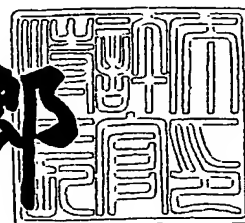
ダイキン工業株式会社

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2003年 3月18日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田信一郎



出証番号 出証特2003-3017518

【書類名】 特許願

【整理番号】 DA020067P

【提出日】 平成14年 2月 8日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 F25B 1/00

【発明者】

【住所又は居所】 滋賀県草津市岡本町字大谷 1 0 0 0 番地の 2 ダイキン
工業株式会社 滋賀製作所内

【氏名】 平良 繁治

【特許出願人】

【識別番号】 000002853

【氏名又は名称】 ダイキン工業株式会社

【代理人】

【識別番号】 100094145

【弁理士】

【氏名又は名称】 小野 由己男

【連絡先】 0 6 - 6 3 1 6 - 5 5 3 3

【選任した代理人】

【識別番号】 100111187

【弁理士】

【氏名又は名称】 加藤 秀忠

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 020905

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法、および冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断ツール

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

冷媒使用機器（10，11）または冷媒配管（9）の再利用可能性について判断を行う判断方法であって、

前記冷媒使用機器（10，11）または冷媒配管（9）の内部に残る残留物をチェックツール（30）に付ける第1ステップと、

前記残留物を付けたチェックツール（30）の色に基づき、前記冷媒使用機器（10，11）または冷媒配管（9）の利用可能性について判断を行う第2ステップと、

を備えた冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法。

【請求項 2】

前記チェックツール（30）は、前記残留物を付ける第1手段（33）と、前記判断の基準となる基準色を示す第2手段（31，32）とを有しており、

前記第1ステップでは、前記第1手段（33）に前記残留物を付け、

前記第2ステップでは、前記第1手段（33）の色を前記第2手段（31，32）の基準色と比較して前記判断を行う、

請求項 1 に記載の冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法。

【請求項 3】

前記チェックツール（30）の第2手段（31，32）は、複数の基準色を示す、

請求項 2 に記載の冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法。

【請求項 4】

前記チェックツール（30）の第2手段（31，32）は、前記冷媒使用機器（10，11）または冷媒配管（9）の利用に際して洗浄処理が不要である正常色と、前記冷媒使用機器（10，11）または冷媒配管（9）の利用に際して洗浄処理が必要となる境界にある境界色とを示す、

請求項 3 に記載の冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法。

【請求項 5】

前記チェックツールの第 2 手段は、前記冷媒使用機器（1 0， 1 1）または冷媒配管（9）の洗浄が必要か否かの判断の基準となる第 1 境界色と、前記冷媒使用機器（1 0， 1 1）または冷媒配管（9）の使用が可能か否かの判断の基準となる第 2 境界色とを示す、

請求項 3 に記載の冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法。

【請求項 6】

請求項 2 から 5 のいずれかに記載の冷媒使用機器（1 0， 1 1）または冷媒配管（9）の再利用可能性の判断方法で用いる前記チェックツール（3 0）であって、

前記第 1 手段（3 3）と前記第 2 手段（3 1， 3 2）とが互いの近傍に配置され一体化されているチェックツール。

【請求項 7】

前記チェックツールは、酸あるいはアルカリにより色が変わる pH 分析ツールであり、

前記第 1 ステップでは、前記 pH 分析ツールに前記残留物を付け、

前記第 2 ステップでは、前記 pH 分析ツールの色から前記残留物の劣化度合いを推定して前記判断を行う、

請求項 1 に記載の冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法。

【発明の詳細な説明】

【0 0 0 1】

【発明の属する技術分野】

本発明は、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法および冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断ツールに関する。

【0 0 0 2】

【従来の技術】

近年、オゾン層の破壊が問題となったことから、冷媒として使用される H C F C の全廃に向けた削減が始まっている。今後、世界的に H C F C 系冷媒（H C F

C22など)の段階的な削減を進めることになっており、これに代えてHFC系冷媒などの代替冷媒を使用する必要がある。

【0003】

このような状況において、既設の冷媒使用機器(空気調和機など)を代替冷媒を用いたものに変更するケースが増えている。

ところで、マンションやビル等の建物内に配備されているマルチタイプの空気調和機や、個人宅において全館空調を行う空気調和機(ハウジングエアコン)では、室内機と室外機とを結ぶ冷媒配管が壁面に埋設されていたり、天井裏に通っていたりする。このような場合に、既設の空気調和機を撤去して新しい空気調和機を設置するためには、既設の冷媒配管を新しい空気調和機で流用(再利用)できるか否かが設置コスト上の重要なファクターとなってくる。既設配管を取り替える工事には、多大な時間と費用がかかるからである。また、流用できる場合においても、既設の冷媒配管の洗浄が必要となるか否かが、設置コスト削減のファクターとなる。

【0004】

一般に、既設配管には、不純物を含む冷凍機油が配管に付着して残っている。この残油の汚れが激しければ、新たに使用する冷媒に残留不純物が溶け込み、膨張機構である減圧器(膨張弁やキャピラリーチューブ)が詰まって作動しなくなったり冷凍機油が劣化したりする恐れが高い。特に、HFC系冷媒に対して用いられる冷凍機油は、エーテル油やエステル油等の合成油であり、その極性の高さから既設配管の残留不純物を溶かしやすい性質を有している。したがって、新しい空気調和機においてHFC系冷媒を使う場合には、既設配管の残留不純物によって新しい空気調和機の減圧器に不具合が発生する恐れが高い。

【0005】

このため、現状においては、10年~20年の間使っている既設配管を流用しようとする場合には、洗浄機を用いて配管内を洗浄する作業が行われている。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

しかし、既設配管を洗浄する洗浄機は非常に高価なものであり、また、洗浄に

かかる費用も安くはない。

また、取り外した既設の冷媒使用機器についても、環境への配慮から、再利用できるものは可能な限り再利用することが望ましい。既設の機器の中には、洗浄すれば再利用できるものや、圧縮機などの一部の部品だけを取り替えれば再利用できるものなどが存在する。

【 0 0 0 7 】

本発明の課題は、冷媒使用機器または冷媒配管を再利用することを目的とした冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性についての簡易な判断方法を提供することにある。

【 0 0 0 8 】

【課題を解決するための手段】

請求項 1 に係る冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行う判断方法であって、第 1 ステップと、第 2 ステップとを備えている。第 1 ステップでは、冷媒使用機器または冷媒配管の内部に残る残留物をチェックツールに付ける。第 2 ステップでは、残留物を付けたチェックツールの色に基づき、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行う。

【 0 0 0 9 】

本発明者は、交換あるいは再利用する冷媒使用機器や冷媒配管内の残留物のサンプルを多く収集し、冷媒使用機器または冷媒配管が再利用可能であるか否かの判断や洗浄が必要か否かの判断が、残油等の残留物の色によって判断できることを見いだした。

そして、本発明者は、チェックツールを用い、このチェックツールに付けた冷媒使用機器または冷媒配管内の残留物の色をサンプル等と比較することで、高い精度で冷媒使用機器または冷媒配管の利用可能性の判断ができることを見いだした。

【 0 0 1 0 】

この見地に基づき、ここでは、冷媒使用機器または冷媒配管の残留物が付けられたチェックツールの色から、冷媒使用機器または冷媒配管の利用可能性につい

て判断を行っている。これにより、チェックツールを用いて冷媒使用機器または冷媒配管の利用可能性を色によって簡易に判断することができるようになり、冷媒使用機器または冷媒配管の内部がそれほど汚れておらず洗浄の必要がない場合に無駄な洗浄作業を行ったり、洗浄しても使えないくらい冷媒使用機器または冷媒配管の内部が汚れているにもかかわらず洗浄作業だけをして再利用してしまったりする不具合が抑制されるようになる。

【 0 0 1 1 】

なお、チェックツールとしては、残留物の色そのものを所定の色と比較して再利用可能性に関する判断を行うことができるツールを用いてもよいし、リトマス紙などで残留物のpHをチェックして再利用可能性に関する判断を行うことができるツールを用いてもよい。

請求項2に係る冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、請求項1に記載の判断方法であって、チェックツールは、残留物を付ける第1手段と、判断の基準となる基準色を示す第2手段とを有している。そして、第1ステップでは、第1手段に残留物を付ける。第2ステップでは、第1手段の色を第2手段の基準色と比較して判断を行う。

【 0 0 1 2 】

ここでは、判断の基準となる基準色を示す第2手段がチェックツールに設けられているため、残留物が付けられたチェックツールの第1手段の色と第2手段の基準色とを比較することによって、極めて容易に冷媒使用機器または冷媒配管の再利用の可能性について判断を行うことができる。

なお、チェックツールの第1手段と第2手段とは、別体であってもよいし、両者が一体化されていてもよい。

【 0 0 1 3 】

請求項3に係る冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、請求項2に記載の判断方法であって、チェックツールの第2手段は、複数の基準色を示す。

ここでは、第2手段が複数の基準色を示すものであるため、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用が可能か否かの判断、あるいは冷媒使用機器または冷媒配管

の再利用に洗浄が必要か否かの判断だけでなく、両方の判断を簡易に行えるようにすることができる。また、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性についての他の判断を行うこともできるようになる。さらに、冷媒使用機器または冷媒配管が再利用できることを確認するための基準色を設けることも可能である。

【0014】

請求項4に係る冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、請求項3に記載の判断方法であって、チェックツールの第2手段は、正常色と、境界色とを示す。正常色は、冷媒使用機器または冷媒配管の利用に際して洗浄処理が不要となる色である。境界色は、冷媒使用機器または冷媒配管の利用に際して洗浄処理が必要となる境界にある色である。

【0015】

ここでは、不純物が付いた第1手段の色が境界色と比較して良好なものである場合に、さらに第1手段の色を正常色と比較することによって、より安心して冷媒使用機器または冷媒配管を洗浄無しに利用することができるようになる。

請求項5に係る冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、請求項3に記載の判断方法であって、チェックツールの第2手段は、第1境界色と、第2境界色とを示す。第1境界色は、冷媒使用機器または冷媒配管の洗浄が必要か否かの判断の基準となる色である。第2境界色は、冷媒使用機器または冷媒配管の使用が可能か否かの判断の基準となる色である。

【0016】

ここでは、第1手段の色を第2手段の第1境界色と比較することによって冷媒使用機器または冷媒配管の利用において洗浄作業が必要か否かの判断をすることができる。また、第1手段の色を第2手段の第2境界色と比較することによって冷媒使用機器または冷媒配管の利用自体が可能か否かの判断をすることができる。すなわち、ここでは、第1手段の色を第2手段の第2境界色と比較することで、冷媒使用機器または冷媒配管を廃棄して取り替える必要があるか否かについても判断できる。

【0017】

請求項6に係るチェックツールは、請求項2から5のいずれかに記載の冷媒使

用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法で用いるチェックツールであって、第1手段と第2手段とが互いの近傍に配置され一体化されている。

このチェックツールでは、第1手段と第2手段とが近接配置されているため、第1手段の色を第2手段の色とを見比べて容易に冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行うことができる。

【0018】

請求項7に係る冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、請求項1に記載の判断方法であって、チェックツールは、酸あるいはアルカリにより色が変わるpH分析ツールである。そして、第1ステップでは、pH分析ツールに残留物を付ける。第2ステップでは、pH分析ツールの色から残留物の劣化度合いを推定して、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行う。

【0019】

ここでは、チェックツールがpH分析ツールであるため、冷媒使用機器または冷媒配管の内部の残留物に酸やアルカリが生じている場合に、酸やアルカリの程度をpH分析ツールの色から判断することが容易である。そして、酸やアルカリの程度から、冷媒使用機器または冷媒配管の内部の残留物の劣化度合いを推定することができる。このように推定された残留物の劣化度合いに基づけば、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断することが可能である。

【0020】

【発明の実施の形態】

図1に、室外機10および室内機11を有する空気調和機の冷媒回路図を示す。四路切換弁2の1次ポートには、圧縮機1の吐出側および吸込側が接続されている。また、四路切換弁2の2次ポートには、室外熱交換器3、膨張弁4、および室内熱交換器5が順に接続されている。また、冷媒回路には、液閉鎖弁6およびガス閉鎖弁7が設けられている。

【0021】

室外機10と室内機11との間は、冷媒連絡配管9によって結ばれている。この配管9は、マンション、ビル、全館空調システムの住宅などにおいては、壁や

天井の裏側に埋設されている。

このようなビル等に設置されている空気調和機は、現状においては、冷媒としてHFC22が用いられているものが多い。これをHFC系冷媒を用いた空気調和機に入れ替える際に、以下に示す本発明の一実施形態に係る判断方法を用いれば、無駄な洗浄作業を行ってしまうことがなくなり、コストの削減につなげることができる。

【0022】

＜既設配管の再利用における洗浄作業の要否に関する判断方法＞

既設の空気調和機を撤去する際には、まず、ポンプダウン運転等によって液冷媒を室外熱交換器3に集めて回収する。これにより既設の配管9内にあった冷媒や冷凍機油が除去されるが、配管9の内面には、少なくとも幾らかのコンタミ物質を含む残油が付着して残る。

【0023】

この残油の汚れ具合を、図2に示すチェックシート30によって簡易にチェックすることで、既設の配管9の再利用における洗浄作業の要否に関する判断を行う。

チェックシート30は、名刺サイズの小型のツールであり、既設の配管9の設置場所において使うことができるようになっている。このチェックシート30は、洗浄要否基準色を示す第1部31と、正常油色を示す第2部32と、残油を付着させるための採取部33と、使用についての説明を示す説明部34とが、一体になっているシートである。第1部31の洗浄要否基準色は、配管9を再利用するに際して配管9の洗浄処理が必要であるか否かを判断する基準になる色であり、これよりも残油の色が濃ければ洗浄が必要、薄ければ洗浄が不要と判断することができる基準色である。第2部32の正常油色は、配管9を洗浄処理なしに再利用することができる残油の色を表している。したがって、残油の色が第1部31の洗浄要否基準色よりも第2部32の正常油色に近ければ、配管洗浄することなく配管9の再利用を行うことができることになる。これらの第1部31および第2部32は、互いに隣り合っているとともに、それぞれ採取部33と隣り合っており配置されている。

【0024】

チェックシート30の採取部33は、脱脂綿あるいは布から構成されており、例えば使用者が配管9の内面をチェックシート30で拭う動作をすることで配管9内の残油が付着する。この採取部33に付着した残油の色を第1部31の洗浄要否基準色と比較することによって、配管9を再利用するに際して洗浄が必要か否かを判断することができる。

【0025】

既設の空気調和機の室外機10や室内機11を撤去する際に、このチェックシート30を現地に持っていけば、簡単に既設の冷媒連絡配管9の流用（再利用）について判断をすることができる。使用者は、まずチェックシート30の採取部33を配管9の内面に押しつけるなどして配管9内の残油を採取部33に付着させ、次に採取部33に付いた残油の色を第1部31の洗浄要否基準色や第2部32の正常油色と比較する。そして、採取部33の残油の色が第1部31の洗浄要否基準色よりも第2部32の正常油色に近ければ、配管9の再利用において配管洗浄の必要がないと判断でき、採取部33の残油の色が第1部31の洗浄要否基準色よりも濃ければ、配管9の再利用において配管洗浄の必要があると判断できる。

【0026】

なお、チェックシート30の第1部31の洗浄要否基準色や第2部32の正常油色は、数多く蓄積されてきた既設配管内の残油のデータから決められているものである。このチェックシート30を使えば、既設配管の流用における配管洗浄の要否を極めて高い精度で正しく判断することが可能である。

＜本実施形態の洗浄作業要否の判断方法を用いるメリット＞

(1)

従来においては、既設配管の汚れ具合を確認することに時間や大きなコストがかかることから、そのような汚れ具合の確認作業をすることなく、無条件に既設配管を洗浄して再利用する方法が採られている。

【0027】

これに対し、本実施形態の判断方法を用いれば、既設の配管9の設置場所であ

る現地において使うことのできる簡易なチェックシート30によって、その場で、簡易に且つ高い精度で、冷媒連絡配管9の再利用に対する配管洗浄作業の可否を判断することができる。

そして、チェックシート30を使って既存の冷媒連絡配管9をチェックすることで、既設の配管9内の残油がそれほど汚れておらず洗浄の必要がない場合には、無駄な配管洗浄作業を省略して、配管9の再利用にかかるコストを削減することができるようになる。

【0028】

(2)

ここでは、配管洗浄の可否を判断するための洗浄可否基準色を示す第1部31をチェックシート30に設けるとともに、正常油色を示す第2部32をチェックシート30に設けている。したがって、チェックシート30の使用者は、採取部33に付けた残油の色が第1部31の洗浄可否基準色よりも薄いと視認して配管洗浄が不要であると判断できるとともに、採取部33に付けた残油の色が第1部31の洗浄可否基準色よりも第2部32の正常油色に近いと視認することで配管洗浄の不要判断をより確実なものとすることができる。

【0029】

(3)

チェックシート30では、第1部31や第2部32と採取部33とが近接配置されているため、洗浄可否基準色や正常油色と採取部33に付いた残油の色とを見比べる作業が容易となっている。

なお、既設の空気調和機で使われていた冷凍機油の種類により若干の差異はあるが、概ね、第1部31の洗浄可否基準色は赤に近いオレンジ色に若干黒みがかかった色となり、第2部32の正常油色は透明に近い黄色に赤みがかかった色となる。

【0030】

＜既設配管内の残油が極度に汚れている場合について＞

上記のチェックシート30によって、採取部33に付いた残油の色に基づき配管洗浄作業の必要性について判断することができる。チェックシート30の使用

者は、残油の色が第 1 部 3 1 の洗浄要否基準色よりも少し濃いようであれば、既設の配管 9 を洗浄して再利用することを決定できる。

【 0 0 3 1 】

しかし、採取部 3 3 に付けた残油の色が非常に濃く残油の劣化が激しいと思われる場合には、図 3 に示す色見本表 4 0 を使って配管 9 が再利用できるか廃棄しなければならないかを判断することになる。すなわち、チェックシート 3 0 に加えて色見本表 4 0 を用意しておき、両方を使って既設の冷媒連絡配管 9 の再利用に関する判断を行うことが望ましい。

【 0 0 3 2 】

図 3 の色見本表 4 0 は、A S T M (American Standard Test Method) 色符号を印刷したシートであり、“1”～“8”の色符号の上に色表示部 4 1～4 8 が配置されている。色表示部 4 1 に示される色は薄い黄色であり、色符号の番号が増えるにしたがって赤みが増し、色表示部 4 4 に示される色はオレンジ色である。また、さらに色符号の番号が増えると、赤みに加えて黒みがかかってくる。そして、色表示部 4 8 に示される色は赤黒い色となっている。なお、チェックシート 3 0 の第 1 部 3 1 の洗浄要否基準色は、色見本表 4 0 の色表示部 4 4 に示される色に相当する。

【 0 0 3 3 】

配管 9 の再利用についてチェックする人は、残油の色が色見本表 4 0 の色符号 1～3 の色に相当する場合には配管洗浄なしに配管 9 を再利用することができ、残油の色が色符号 4～8 の色に相当する場合には配管洗浄を施した上で配管 9 を再利用することができ、残油の色が色符号 8 の色よりも濃く黒みが強い場合には配管 9 を再利用することができないという判断をすることになる。すなわち、チェックシート 3 0 の採取部 3 3 に付けた残油の色が非常に濃く残油の劣化が激しいと思われる場合には、色見本表 4 0 の色表示部 4 8 の色と残油の色とを比較し、残油の色が色表示部 4 8 の色 (A S T M 色符号 8 の色) よりも濃ければ既設の配管 9 を廃棄して新しい冷媒配管を敷設することを決定することになる。これは、残油の色が色表示部 4 8 の色 (A S T M 色符号 8 の色) よりも濃く黒色に近い色となっている場合には、既設の空気調和機における圧縮機摺動材などの潤滑不

良による摩耗粉などが残油の黒色の主成分であり、圧縮機、冷媒系部品、および冷媒配管は洗浄しても付着物（異物）が除去できないことが多いためである。

【 0 0 3 4 】

＜既設の空気調和機の圧縮機が動かなくなっている場合について＞

従来においては、圧縮機が動かなくなっている場合であっても、それほど古くなければ既設の冷媒配管を洗浄して再利用することが行われている。

しかしながら、冷媒が漏れていたことで配管内の温度があがって圧縮機のモータが焼き付いていた場合などは、配管内で酸化が進んでいる恐れが高いため、洗浄しても既設の冷媒配管を使うことは好ましくない。

【 0 0 3 5 】

これに対しても、上記のように残油の色を色見本表 4 0 を使ってチェックすることが有効である。配管 9 内の酸化が進んでいる場合には、残油の色が A S T M 色符号 8 の色よりも黒ずむように変化しているはずだからである。

このように、上記のチェックシート 3 0 や色見本表 4 0 を使った判断方法を用いれば、圧縮機 1 のモータが焼き付いて配管洗浄を行っても使えないくらい既設配管 9 内が酸化しているにもかかわらず洗浄作業だけをして既設配管 9 を再利用してしまったりする不具合が抑制される。

【 0 0 3 6 】

＜変形例＞

(A)

チェックシート 3 0 や色見本表 4 0 の代わりに、酸あるいはアルカリにより色に変化するリトマス紙を用いて既設の配管 9 の再利用に関する判断を行うことも考えられる。リトマス紙等の p H 分析ツールを使えば、配管 9 内の残油の全酸価の値がわかるため、これを基準として配管 9 の再利用の可能性や再利用時に洗浄が必要か否かといった判断を行うことができる。特に、リトマス紙等の p H 分析ツールを使うと、配管 9 の酸化劣化（フッ酸、蟻酸、塩酸などの発生）を精度良く簡易に判定することができる。

【 0 0 3 7 】

また、このリトマス紙等の p H 分析ツールを使った配管 9 の再利用に関する判

断を、チェックシート30や色見本表40による判断に対して補完的に加えることも好ましい。この場合には、残油の劣化の程度が2重にチェックされ、配管9の再利用に関する判断がより正確なものとなる。

(B)

上記実施形態のチェックシート30や色見本表40は、配管9を洗浄した後に、配管9が所定のレベルまできれいになっているか否かをチェックする検査において用いることも可能である。再利用できると判断された配管9を洗浄した後に、チェックシート30等を用いて配管9内の汚れ具合を確認することで、新しい空気調和機をより安心して使うことができるようになる。

【0038】

(C)

上記のチェックシート30では洗浄要否基準色を示す第1部31および正常油色を示す第2部32を設けているが、これらに加えて、あるいは第2部32に代えて、廃棄要否基準色を示す第3部をチェックシート30に設けることも考えられる。廃棄要否基準色は、第1部31の洗浄要否基準色よりも劣化した油の色に相当するものであって、洗浄しても使えないほど配管9内の残油が劣化しているのか、それとも洗浄処理を行うことで配管9を再利用することができるのかを見極めるための基準色である。具体的には、廃棄要否基準色は、上記の色見本表40の色表示部48の色（ASTM色符号8の色）に近い色となる。

【0039】

このように、洗浄要否基準色および廃棄要否基準色を示すチェックシートを使えば、色見本表40を使わなくても、配管9を廃棄しなければならないか否かを判断することができるようになる。すなわち、このチェックシートを使う使用者は、採取部33に付着させた配管9内の残油の色が廃棄要否基準色よりも濃ければ、配管9は洗浄しても使用することができず廃棄しなければならないと判断し、採取部33の色が洗浄要否基準色よりも濃く且つ廃棄要否基準色よりも薄ければ、配管9は洗浄することによって再利用することができると判断することになる。

【0040】

(D)

上記のチェックシート 3 0 では第 1 部 3 1 や第 2 部 3 2 と採取部 3 3 とを一体化しているが、第 1 部 3 1 や第 2 部 3 2 と採取部 3 3 とが別体となっているツールを用いることも可能である。

また、採取部 3 3 に相当する綿棒やウエス等を色見本表 4 0 とともに用い、それらによって配管 9 の再利用に関する判断を行うようにしてもよい。

【 0 0 4 1 】

(E)

撤去する既設の空気調和機のリサイクルやリユースができるか否かの判断に、チェックシート 3 0 や色見本表 4 0 を使用することもできる。撤去した空気調和機の配管部分の残油が激しく酸化していると既設の空気調和機の部品は一切リサイクルできない場合が多いが、残油の汚れの程度が小さいときには圧縮機を除けば他は再利用できる場合もあるからである。

【 0 0 4 2 】

【発明の効果】

請求項 1 に係る発明では、冷媒使用機器または冷媒配管の残留物が付けられたチェックツールの色から冷媒使用機器または冷媒配管の利用可能性について判断を行っている。これにより、チェックツールを用いて冷媒使用機器または冷媒配管の利用可能性を色によって簡易に判断することができるようになり、冷媒使用機器または冷媒配管の内部がそれほど汚れておらず洗浄の必要がない場合に無駄な洗浄作業を行ったり、洗浄しても使えないくらい冷媒使用機器または冷媒配管の内部が汚れているにもかかわらず洗浄作業だけをして再利用してしまったりする不具合（少なくともいずれかの不具合）が抑制されるようになる。

【 0 0 4 3 】

請求項 2 に係る発明では、判断の基準となる基準色を示す第 2 手段がチェックツールに設けられているため、残留物が付けられたチェックツールの第 1 手段の色と第 2 手段の基準色とを比較することによって、極めて容易に冷媒使用機器または冷媒配管の再利用の可能性について判断を行うことができる。

請求項 3 に係る発明では、第 2 手段が複数の基準色を示すものであるため、冷

媒使用機器または冷媒配管の再利用が可能か否かの判断、あるいは冷媒使用機器または冷媒配管の再利用に洗浄が必要か否かの判断だけでなく、両方の判断を簡易に行えるようにすることができる。また、冷媒使用機器または冷媒配管が再利用できることを確認するための基準色を設けることも可能である。

【0044】

請求項4に係る発明では、不純物が付いた第1手段の色が境界色と比較して良好なものである場合に、さらに第1手段の色を正常色と比較することによって、より安心して冷媒使用機器または冷媒配管を洗浄無しに利用することができるようになる。

請求項5に係る発明では、第1手段の色を第2手段の第1境界色と比較することによって冷媒使用機器または冷媒配管の利用において洗浄作業が必要か否かの判断をすることができる。また、第1手段の色を第2手段の第2境界色と比較することによって冷媒使用機器または冷媒配管の利用自体が可能か否かの判断をすることができる。

【0045】

請求項6に係る発明では、第1手段と第2手段とが近接配置されているため、第1手段の色を第2手段の色とを見比べて容易に冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行うことができる。

請求項7に係る発明では、チェックツールがpH分析ツールであるため、冷媒使用機器または冷媒配管の内部の残留物に酸やアルカリが生じている場合に、酸やアルカリの程度をpH分析ツールの色から判断することが容易である。そして、酸やアルカリの程度から、冷媒使用機器または冷媒配管の内部の残留物の劣化度合いを推定することができる。このように推定された残留物の劣化度合いに基づけば、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断することが可能である。

【図面の簡単な説明】

【図1】

本発明の一実施形態に係る再利用に関する判断対象となる冷媒連絡配管を含む空気調和機の冷媒回路図。

【図 2】

チェックシートの平面図。

【図 3】

色見本表の平面図。

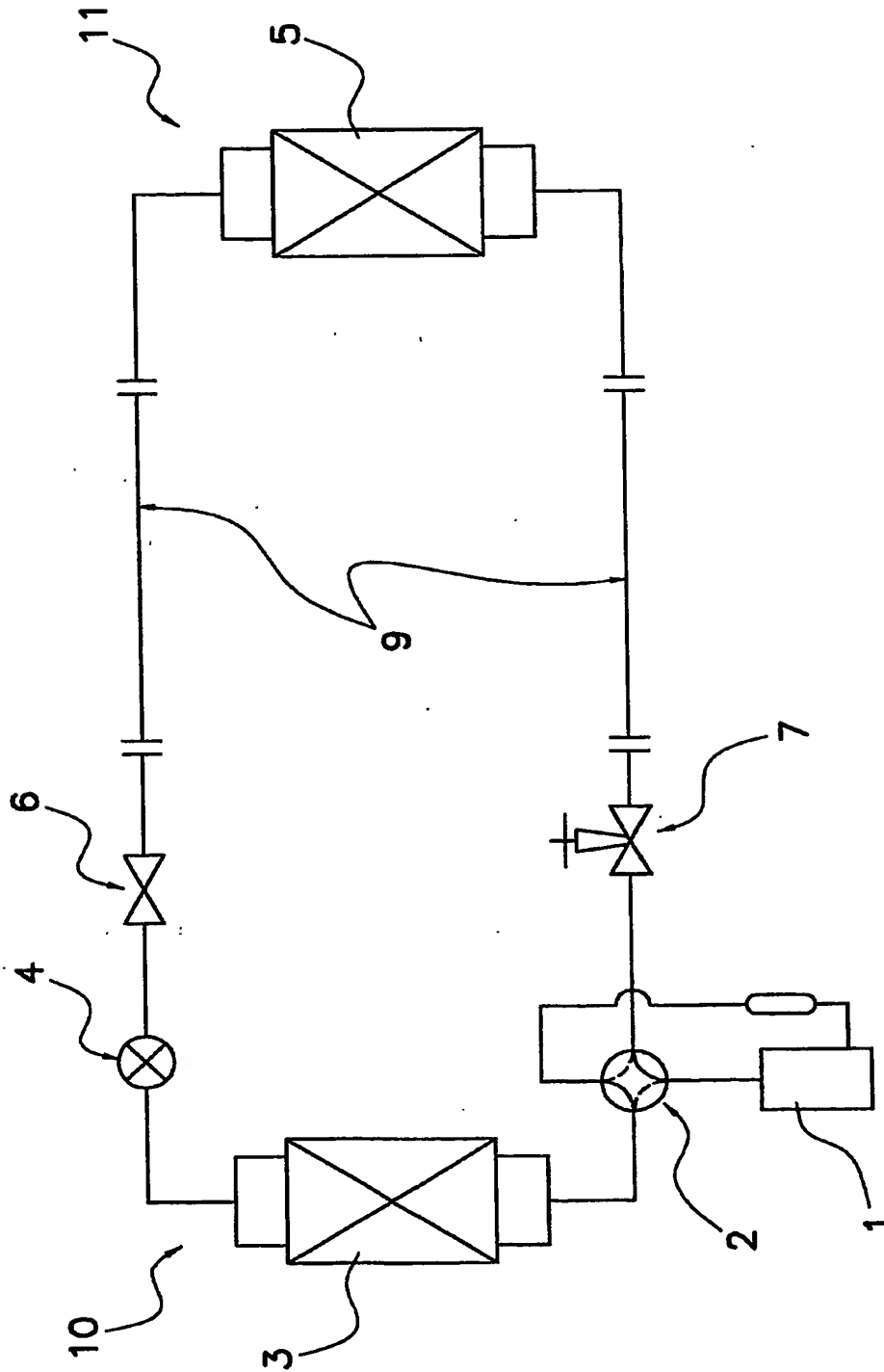
【符号の説明】

- 9 冷媒連絡配管（冷媒配管）
- 10 室外機（冷媒使用機器）
- 11 室内機（冷媒使用機器）
- 30 チェックシート（チェックツール）
- 31 第1部（第2手段）
- 32 第2部（第2手段）
- 33 採取部（第1手段）

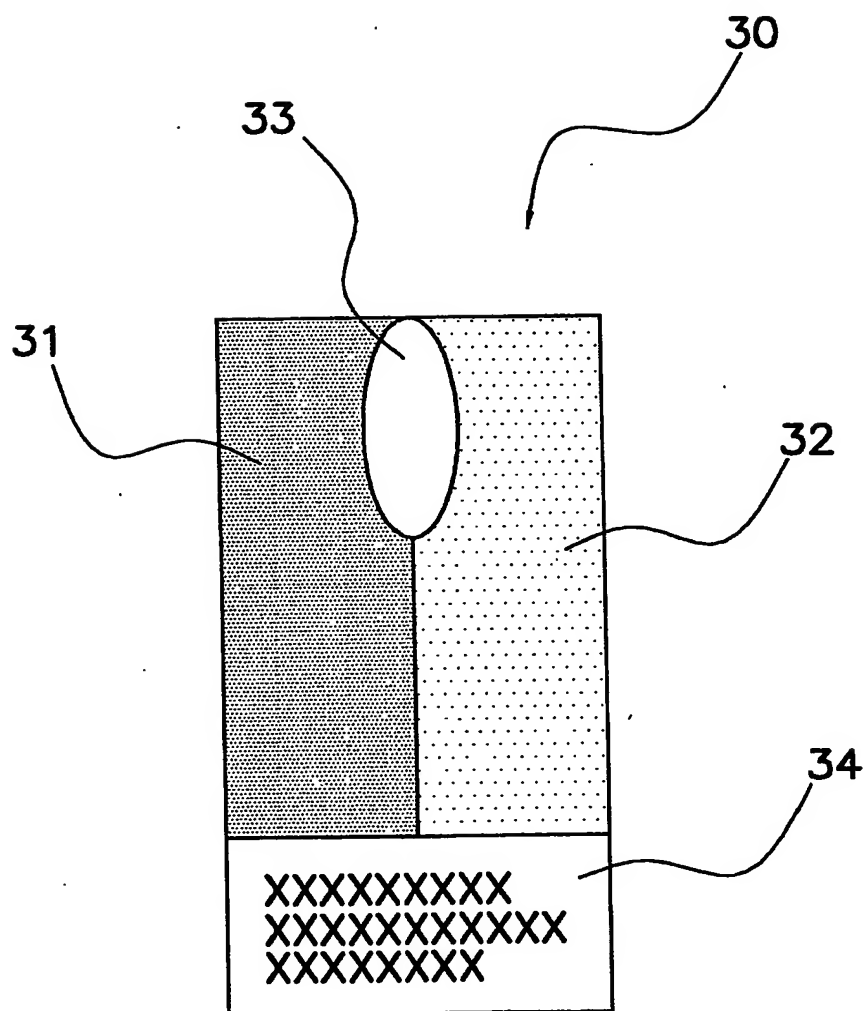
【書類名】

図面

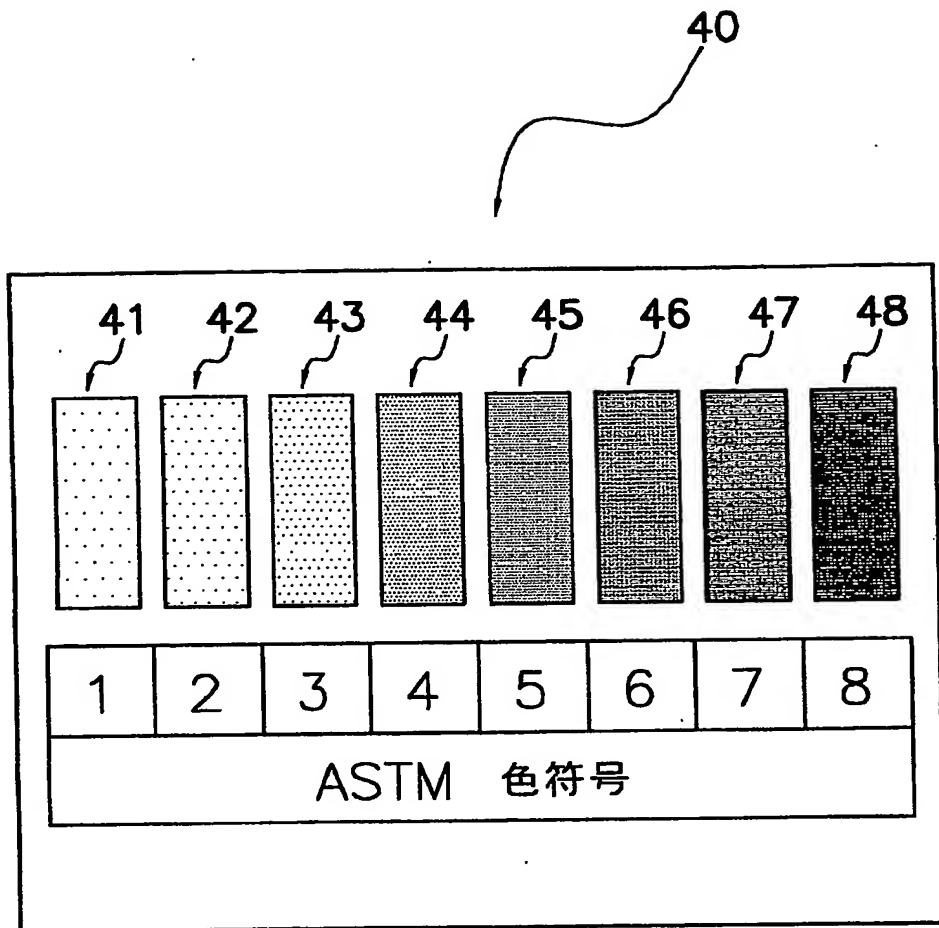
【図 1】



【図 2】



【図3】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 冷媒使用機器または冷媒配管を再利用することを目的とした冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性についての簡易な判断方法を提供する。

【解決手段】 冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性の判断方法は、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行う判断方法であって、第1ステップと、第2ステップとを備えている。第1ステップでは、冷媒使用機器または冷媒配管の内部に残る残留物をチェックシート30に付ける。第2ステップでは、残留物を付けたチェックシート30の色に基づき、冷媒使用機器または冷媒配管の再利用可能性について判断を行う。

【選択図】 図1

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000002853]

| | |
|----------|------------------------------|
| 1. 変更年月日 | 1990年 8月22日 |
| [変更理由] | 新規登録 |
| 住 所 | 大阪府大阪市北区中崎西2丁目4番12号 梅田センタービル |
| 氏 名 | ダイキン工業株式会社 |